

## 学生相談室報告(14)

額 額 康 兵

### Report From the Counseling Room(No.14)

Kohei KOKETSU

The Unconscious theory by Sigmund Freud is briefly mentioned in this note.

今回は人間の無意識・夢等について雑感的に記してみたい。

#### (1) 無意識の発見

一般に無意識の発見者と言えば、精神分析の創始者であるジークムント・フロイト(1856-1939)と言う事になるであろう。

フロイトは、今日では、しばしばダーウィン、アインシュタイン、マルクスなど現代の思想と科学に決定的な影響を与えた思想家と並べて論じられている。

では、フロイトの言う無意識とは一体何を意味するのであろうか。我々自身のどこかに、『無意識なる領域』が存在するのであろうか。それについて、以下に、簡単に述べてみよう。

無意識とは、我々の日常生活に於ける行動の中で、意識されない、又、意識出来ない精神活動を意味する。確かに、我々は、日常生活の中で行っている行為や思考、そして、感情の動きなどの精神活動について、十分に分かっていると思っているし、又、当然だと感じている。が、はたしてそうであろうか。意識的に自覚された精神活動・生活は、フロイトに従えば、意識下にある種々様々の衝動や欲求に動かされているのである。例えば、一例を挙げれば、子供の頃から、祖母が恐く、又、厳しい思いをした人は、その人が大人に成ってから祖母に似た人を見た

り、出会ったりした場合、その人は必要以上に緊張したり、うわずった気分になり、落ち着いた行動が出来なくなる。その様な場合、彼自らが、恐くて、厳しい、祖母像を他の女性に投影している事を自覚した時に初めて彼の不快感は解消するのである。この場合、彼は祖母への恐れ、苦痛、不快などを意識下(無意識)の世界に封じ込めていたのである。この様に、何気ない不快さや緊張感、あるいは失策行為・錯誤行為(言い違い、書き違い、読み違い、聞き違い、物忘れ)や夢などの形を通して、本来意識の世界にあった強い感情的なこだわりを我々は、無意識の世界に閉じ込めていると考えられるのである。神経症の心因的な説明として心の無意識の働きに注目したのは、フロイトであった。特に、フロイトは、心の働きを『意識』『前意識』『無意識』の局所論の観点に分けて理解し、『無意識』は、水面下奥深く全く見えない世界で、特殊な方法(例えば、夢分析や精神分析療法など)でしか、知り得ないような心の世界であるが、常に我々の日常生活に大きな影響を与えている事を強調した。<sup>(1)</sup>

#### (2) 夢

一人の天才的とも言える人間の出現によって、それまで真実であると考えられていた理論があっさり打ち破られたりする事がよくある。一人の人間によって時代が動いて行く事の是非はともかく、その様な事が多いのもまた事実である。恐らく、人類の歴史と共に始まったと思われる『夢』について、又、

『夢』の解釈について、多くの人々の考え方を根底から揺さぶり、変化させたのは言う迄もなくフロイトその人であった。フロイトが『夢判断』なる書物を出版し、その考え方が多くの人々の賛同を得るに従って、『夢』に対する人々の見解は大きく変化して行った。

フロイトは『夢』を無意識を探る手がかりとみなし、『夢』を分析し、様々な解釈を与える事が無意識の世界を垣間みる事になると考えた。

フロイト以前の夢の歴史については、一般的に、洋の東西を問わず、夢は公的なものを決定する為の神託として利用された。人々はその神託を自己自身の羅針盤にしたのである。夢と神託の結び付きは社会の重要な儀式に取り入れられ宗教家によって夢は特定の解釈が為される様になった。

が、ルターの宗教改革以後、宗教の神秘性が失われると夢も世俗化し、夢は古いとして社会の底辺へと流れて行った。

この様な時代的背景下に於いて、フロイトの『夢判断』が表れて来たのである。その歴史的意義は①「夢は個人の願望充足である」と言うテーゼをフロイトは提出した。②「夢はそれ自体としての構造をもつ事」を明かにした。③「夢判断」を精神分析の治療構造ないし治療の枠組みの中に技法的に位置づけた。<sup>(2)</sup>

無意識に隠された願望が姿を変えて夢になる。従って、夢は「顕在夢」と呼ばれる。顕在夢とは、無意識に在る思考や願望（潜在思考）が姿を変えて示されるものである。それでは何故、潜在思考は顕在夢となる為に姿を変えねばならないのだろうか。それは、多分次の様な理由に依っている。潜在思考の中に潜む性の衝動や激しい欲動などがそのまま表現されると、自我を脅かし、大きな不安を生んだり衝動性に圧倒され、現実生活に重大な障害をもたらす可能性があるからである。この為に自我の防衛として強い抑圧が加えられ、自我による検閲と言う操作が行われる。フロイトはこの様な姿を変える心的な操作を「夢の作業」と言い、姿を変える方法を「夢の歪曲」と呼んでいる。<sup>(3)</sup>

一方、ユング（1875－1961）にあっては、夢は無意識の願望充足に終わらず、意識的態度の偏りを補う補償的機能を持ち、夢分析を通して将来の可能性への予見や啓示さえも得られるとする。フロイトによって息を吹き返した夢の心が、ユングを経

て、古代人の信じた夢の予言性の復権に接近して来た事は興味のある事である。<sup>(4)</sup>

### （3）無意識と夢からの創造性

自我の主体性や統合性が危うく成ったり、脅かされる時（例えば、神経症の症状に悩まされる）、無意識は否定的な評価を受けがちであった。が、ユングは無意識のもつ創造的な面に注目する様になった。意識内に於いて対立（矛盾）する考えや感情などがあるとき、その片方を無視したり、抑制したりせず、あくまでその対立の中に身を置いて苦悩していると、そのうちに、心のエネルギーが無意識内へと流れ始め、自我はいわゆる無心の状態に陥ったり、ただ無力感に襲われたりする。しかし、それにも耐えていると、心のエネルギー意識の方へと還流するのに無意識の内容が乗って、自我によって把握される事になる。その内容は言語的に明確ではなく、イメージによって把握される事が多いが、それが新しい創造の根幹となるのである。

ユングはこの様な過程を重要視し、無意識のもつ創造的な面の存在を考えた。そして、その過程に於ける心的エネルギーの無意識への流れを「退行」と考えるにしろ、それは病的退行ではなく、創造的退行として考えるべきだと主張した。この「退行」の状態の時に、その個人が幼稚な行動をしたりする事はあっても、それは創造に至る過程の一種の副作用の様なもので、その事自体を重くみる必要はないと思われる。それは、その事自体を直ちに「病的」と判断してしまう必要はない、と考えられるのである。現在の深層心理学の諸派に於いても、無意識の創造的側面を認める事については見解が一致していると考える事が出来る。

無意識内容が意識化される時、イメージとして把握される事が多いと述べた。イメージ、又は、ファンタジーは、無意識の研究に極めて重要になってくる。それは夢の重視と言う事と密接な関係を持ってくる。夢は睡眠中に自我の統合力が弱まった時、意識と無意識の相互作用によって生じた事を、自我がイメージによって把握したものである。簡単に言えば、夢は個人が毎晩行っている創造過程である、と言えるであろう。が、これは一面的であり、それが真の創造につながる為には、覚醒した自我意識との関係が必要になってくる。

### （4）意識・無意識を越えて

無意識と言う考え方は、西洋の近代的自我の存在

を前提とする時に、はじめて意味をなすものである。他と明確に区別されたものとしての自我の確立を前提として、その自我に作用を及ぼす心の在り方として、無意識と言う考え方が浮かび上がってきたのである。これに対して、東洋に於いては、その様な自我を確立するのではなく、むしろ、意識の在り方を変化させ、その変化した意識によって現実を把握する事が、現実認識のうえで重要な意味がある、と言う考え方があった。例えば、禅の修行に於いては、座禅と言う方法によって「悟り」と言われる境地に達する事が目標とされる。ヨガにも色々な方法があるが、その場合も、通常の意識の状態とは異なる意識の状態になる事が目標とされている。

西洋の近代的自我が唯一の「正常な意識」として考えられていた時、その他の状態は「変性意識状態」として、異常な事、病的な事、と考えられていた。シャーマンについての心理学的研究は、当初は、シャーマンの行為を、ヒステリー、てんかん、精神分裂病などの病的現象として説明し様とするものがほとんどであった。この様な西洋の一般的傾向の中で、ウィリアム・ジェームズが『宗教経験の諸相』を今世紀初頭に出版し、日常的意識以外の意識状態の記述を行ない、それを宗教性と結びつけて論じ、その肯定的な面を主張したのは、堂目に値する。ジェームズの考え方は、残念ながらアメリカの心理学会では認められなかった。

一方、ヨーロッパに於いては、ユングが普遍的無意識の存在を主張し、より深い視点から東洋の宗教を理解し様とした。ユングはウィリアム・ジェームズを高く評価し、東洋に於ける「変性意識状態」が深い宗教性と結びつく事を認め、1920年頃より、東洋の禅やヨガなどを高く評価する発言を始めた。が、当時はまだ欧米中心主義の傾向が強く、彼の意見は一般に受け入れられなかった。しかし、ベトナム戦争以後、1970年代になると、欧米中心主義や自然科学万能主義に対する強い反省を経て、急激に変性意識状態に対する評価が変化して来た。それは、今までの心理学の主流をなしていた行動主義の心理学、精神分析的な心理学にあき足らなく思った人々が人間性心理学を提唱したが、その流れの中から生じてきたトランスパーソナル心理学は、近代的自我を越える事を、一つの目標にした。それは、確立された自我に対する「無意識」として現象を理解するのではなく、むしろ、意識の次元には日常的意

識以外のものがあり、それぞれの意識によって現実の把握を試みる事が、その人の人生をより豊かなものにする、と考えるのである。<sup>(5)</sup>

参考文献

- (1) 前田 重治：臨床精神分析学，3，誠信書房，東京，1985。
- 国分 康孝編：カウンセリング辞典，534，誠信書房，東京，1990。
- (2) 鎌幹 八朗：夢分析入門，96，創元社，東京，1976。
- (3) 馬場 謙一編：夢と象徴の深層，58-59，有斐閣，東京，1984。
- (4) 国分 康孝編：カウンセリング辞典，554。
- (5) 河合 隼雄編：こころの科学（27）-無意識の世界-，河合 隼雄：無意識の視点，22-27，日本評論社，1989。

附記：過去1年間に学生相談室で取り扱った件数を相談内容別に集計した下表を参照して頂きたい。

相談内容別取扱件数

(平成2年1月18日～平成3年1月17日)

相 談 内 容	件 数	%
1. 学業全般（留年を含む）	45	44
2. 学生生活	28	27
3. 対人関係（恋愛を含む）	12	12
4. 精神衛生	10	10
5. 進路問題（専攻・就職）	5	5
6. 健康問題	2	2
計	102	100

(受理 平成3年3月20日)